

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720202

研究課題名(和文)日本語における引用述語省略現象

研究課題名(英文)Ellipsis of quotative predicates in Japanese

研究代表者

大島 義和(Oshima, Yoshikazu)

名古屋大学・国際開発研究科・准教授

研究者番号：40466644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円、(間接経費) 210,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語で、引用構文の主部となるべき発話述語「言う」および思考述語「思う」が省略される現象(引用述語省略現象)を対象とした。先行研究の整理の後、研究対象となる現象の下位タイプへの分類、各タイプの形態的特徴・機能的特徴・分布(省略が可能となる条件)の考察を行った。また、引用述語省略現象についてこれまで提案されてきた二つのアプローチである「省略説」「構文説」を比較し、その長短について検討した。

研究成果の概要(英文)：This research addressed the "quotative predicate ellipsis (QPE)" phenomenon in the Japanese language, where the speech predicate "iu" or the psychological predicate "omou", which typically serves as a clause-head, is elided from a quotative construction. After reviewing existing studies, I classified the QPE phenomenon into several subtypes and examined the morphological property, functional characteristics, and the distribution of each variety. Also, I made side-by-side comparison of two major approaches to the QPE phenomenon and considered the advantages and disadvantages of each.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：引用構文 話法 省略 慣用表現

### 1. 研究開始当初の背景

日本語の引用構文に関しては数多くの先行研究があり、その(主にヨーロッパ系言語と比較した場合の)特徴的性質は研究者の関心を集めてきた。日本語引用構文(直接引用構文および間接引用構文)の特徴のひとつとして、様々な条件下で、発話述語(「言う」)または思考述語(「思う」)が省略されることが挙げられる。引用述語省略現象は、多くの日本語学習者向け教材・文法解説書でもとりあげられており、これが日本語の引用に特徴的な現象であることは広く認識されていると言ってよい。しかしながら、引用述語の省略が、様々な条件下で、形を変え、また異なる意味機能と結びついて起こるといふ点については十分な議論が行われてきたとは言えない。

### 2. 研究の目的

引用述語省略現象は、過去の研究において日本語の引用構文の特徴(または特異性)を示すとされてきた現象と密接な関わりを持つ。本研究は、コーパスデータを利用しながら、どのような統語的・意味的条件の下で引用述語の省略が起こりうるかを調査し、実証的・記述的な観点から引用述語省略現象についての一般化と整理を行う。

引用述語が様々な環境下で省略の対象となるというマクロ的傾向を考慮に入れると、過去の研究において日本語の引用構文の特徴(特異性)を示すとされてきた二つの観察にも自然な説明を与えることが可能となる。第一の観察は、日本語の引用構文においては「～と/って」という形式の引用句と直接目的語とが単一の引用述語の下に共起する場合があるというものである(例:「彼は、金庫の金を盗んだのは自分だと告白した」)。この観察に基づき、過去の研究においては、「～と/って」という形式の引用句は補部ではなく、副詞的な性質を持つものであるという主張がなされてきた。

しかしながら、引用句と直接目的語が共起する文は、例えば、「彼は、金庫の金を盗んだのは自分だと言って罪を告白した」のような文から「言って」が省略されることによって成立したものである(すなわち、単一の述語のもとで引用句と直接目的語が共起するのは見かけ上の現象に過ぎない)という理解が可能であり、したがって日本語の引用句は、例えば英語の直接引用句・間接引用句と同様に、補部要素と扱うことができるということになる。

第二の観察は、「ヒロシが『お早う』と入ってきた」のように、「～と/って」という形式の引用句が、引用述語以外の述語の下に生起する場合がある、というものである。引用述語が様々な環境下で省略の対象となるという観察を考慮に入れば、このような文は「ヒロシが『お早う』と言って入ってきた」のような文から引用述語の省略によって成

立したものとみなすのが妥当であると考えられる。

引用述語省略現象の包括的な理解のために、本研究では、(1)引用述語の省略がどのような環境下で起こりうるかを調査し、形態的・統語的観点から分類・整理と一般化を行うこと(2)引用述語省略の個々の下位タイプに関して、その意味的・語用論的性質を考察すること、の2点を主要な目的とした。

### 3. 研究の方法

引用・話法研究についての文献調査を行い、近年の研究における主要な課題と成果を確認する。また、研究テーマである引用述語省略現象について、日本語、他言語を問わず先行研究においてどのような記述・分析がなされているかを整理する。

引用述語が生起する環境(文末、従属節内部、慣用句の一部)を網羅的に検討し、引用述語省略の分類・整理を行う。また、個々の下位タイプに関して、省略が可能となる意味的条件の記述を試みる。

「日本語話し言葉コーパス」、「国会会議録検索システム」といったコーパス資源を利用して引用述語省略の実例を収集し、母語話者の内省にもとづいて行った引用述語省略の分類、および下位タイプの分布の記述の妥当性を検証する。反例や、説明できない用法が見つかった場合には、適宜分析を修整する。

引用述語の省略がもたらす語用論的效果についても考察を行う。特に、「文末型」引用述語省略について、その機能を文末表現(終助詞等)の機能に関する先行研究の知見のなかに位置づけることを試みる。

標準語以外の方言や、日本語以外の言語(特に朝鮮語)における引用述語省略現象についても調査を行い、研究を対照言語学的方向に発展させる。具体的には、日本語(標準語)および他言語・他方言における引用述語省略現象の比較考察を行った上で、引用述語の省略に関して通言語的にどのような共通点が見られるか、またどのような類型論的一般化が可能か、といった点を検討し、今後の引用・話法研究の発展に向けての問題提起を行う。

### 4. 研究成果

日本語における引用の文法論・意味論の特徴を整理するとともに、引用述語省略現象の分類・記述・考察を行った英語論文(佐野真一郎氏との共著)が、引用構文についての論文集 *Quotatives: Cross-linguistic and cross-disciplinary perspectives* (John Benjamins Publishing Company, 2012) に収録された。より具体的には、引用述語省略現象を (i) “Suspensive quotative predicate ellipsis” (連用修飾型引用述語省略)、(ii) “Sentence-final quotative predicate ellipsis” (文末型引用述語省略)、(iii) “Quotative predicate ellipsis in noun-moifying

constructions” (名詞修飾句における引用述語省略)、(iv) “Quotative predicate ellipsis in topic phrases (主題句における引用述語省略)、および (v) “Quotative predicate ellipsis” (譲歩節における引用述語省略) という 5 つのタイプに分類し (以下に例示する)、それぞれの形式的特徴、機能的特徴、および認可条件の記述を行った。

(i) a. 「誰かいますか？」と (言っ) ドアを叩いた。

b. 「もうどうせ間に合わない」と (思っ) 走るのがやめた。

(ii) a. («ヒロシも来るの?」という問いに対して) いや、[今日は忙しい] っ (言っ) てる。

b. («荷物、もう送っちゃいましたか?」という問いに対して) [今から郵便局に行こうか] と (思っ) っていました。どうかしましたか?

(iii) 小津安二郎っ (い) う) 人

(iv) 偶数と (い) う) の) は 2 で割り切れる数のことです。

(v) a. 「来なさい」(っ) て言) っ) たっ) て、来やしないよ。

b. 旅行に行く (っ) てい) っ) たっ) て、三日間だけです。

c. 子どもだから (っ) てい) っ) て、許すことはできない。

また、日本語の引用構文の特徴を示すとされてきた (i) 引用述語の省略が可能である、(ii) 発話・態度述語以外を述語として持つ引用構文が存在する、(iii) 引用句が (あたかも副詞的要素であるかのように) 直接目的語と共起しうる、という三つの観察の内、(ii) と (iii) は、(i) から派生的に生じるものとみなすことが可能であることを論じた。

引用述語省略現象についてこれまで提案されてきた二つのアプローチである「省略説」「構文説」を比較し、その長短を論じる日本語論文 (単著) を、『茨城大学留学生センター紀要 11 号』に投稿し、掲載された。「構文説」を代表する藤田保幸氏の研究を批判的に検討し、「ヒロシが『おはよう』と入ってきた」のような引用述語不在型引用構文 (連用修飾型引用述語省略を伴う引用構文) が、「言ッテ」「思ッテ」の省略によって成立するという分析 (「省略説」にたつ分析) が妥当なものであることを論じた。また、引用述語省略現象と、引用述語以外の種類の述語が省略される場合とを統一的な視点で捉えることの必要性を指摘した。

研究期間最終年度には、(1) 引用述語省略現象のより精緻な記述のための、コーパス資源を利用した事例収集およびデータベース作成、(2) 引用述語省略現象の、Sign-Based

Construction Grammar (記号基盤構文文法) の枠組みにもとづく分析の構築、(3) 他言語 (朝鮮語、アフリカ系諸言語) における関連現象との対照を目的とした文献収集、に取り組んだ。2014 年度以降、成果を論文にまとめ、発表する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

Oshima, David Y. and Shin-ichiro Sano (2012) "On the characteristics of Japanese reported discourse: A study with special reference to elliptic quotation", In: Isabelle Buchstaller and Ingrid Van Alphen (eds.) *Quotatives: Cross-Linguistic and Cross-Disciplinary Perspectives*. Amsterdam, John Benjamins. pp.145-171.

大島デイヴィッド義和 (2013) 「引用述語の現れない発話・思考報告文: 『省略』か『構文』か」『茨城大学留学生センター紀要』11. pp.113-128.

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]  
出願状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等

なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
大島義和 (名古屋大学国際開発研究科)

研究者番号：40466644

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：